



昨年12月に開いた作品展に展示した作品集。藤代駅市民ギャラリーに約90点の作品を展示し多くの方の目を引いた

第二の人生 61歳からの 新たなチャレンジ



シリーズ まち・ひと・しごと #028
アマチュア寄席文字書家
寺嶋高明さん



縁起を担いで書く
江 戸文字の勉強を積んだ寺嶋さんは、6年前、千葉県柏市で落語会を鑑賞した際、「めぐり」がパソコン文字だったことに気づき、落語会の方に「私の字で良かったら無償で書きますよ。」と申し出たのをきっかけに、現在では、柏落語会や大多喜落語会、東京の片岡屏風寄席等に無償で「めぐり」を書いて提供しています。

一昨年からは、年一回ずつ作品展を開き、多くの方に伝統的な文字と、手書き文字の良さを伝える活動をしています。

寄席文字の特徴は、「書道と違い特別な道具は必要なく、筆と墨汁、白い紙があればすぐに始められること。文字の特徴や書き方、筆の動かし方に寄席文字独自の決まりごとはありませんが、それ以外、特別な作法はありません。

寄席文字は「縁起文字」ともいわれ、客を寄せるための書体で、文字そのものを客席と見なし、墨の黒々としたところがお客さま、余白は空席を表しています。日を追うごとにお客さまが集まるようにと願いを込めて、縁起を担いで文字を詰めて右肩上がりに書くことが極意」だそうです。



寺嶋さんが作品展で書いた、柳田國男記念公園の門看板が記念公園に飾られることが決定

寺嶋さんと寄席文字の出会いは8年前。61歳の時でした。定年退職し、何か趣味を持ちたいと考えていたところ、「寄席に行ったときに「めぐり」を見て、格好が良い字だな。自分も書けるようになりたい。」と思ったそうです。

そして、以前から「墨で書く文字」に興味があり、達筆な字を書くことに憧れもあったという寺嶋さんは、寄席文字を習うために、橋流寄席文字の「橋右楽師匠」に弟子入りし、現在も月二回、東京に通い指導を受けているほか、3年ほど前から墨田区アトリエ創藝館「江戸文字職人」大石智弘氏指導の下、月二回江戸文字の勉強にも励んでいます。

皆さんは、「江戸文字」をご存知でしょうか？相撲や寄席などで見かける力強い筆文字をイメージされる方もいらっしゃるかと思いますが、

江戸文字は、書いて字のごとく、江戸時代から脈々と受け継がれている筆文字の事で、歌舞伎の芝居文字「勘亭流」、相撲の番付表などで使われる相撲字「根岸流」、寄席で使われる寄席文字「橋流」、千社札や提灯などに書かれている「籠文字」、そのほか「ひげ文字」や「角字」などの総称をいいます。

今回は、寄席で落語家を紹介する「めぐり」の寄席文字をボランティアで書いている、布川在住のアマチュア寄席文字書家、寺嶋高明さん(69)をご紹介します。

墨で書く文字に興味があった



大多喜落語会の看板を作成。右は、大多喜落語会会長 柴崎光子さん

寄席文字を書くことが生きがい
「要望があれば可能な限りご協力しますし、町内でも何かやれば良いですね。やっぱり、作品に興味を持ってくれたり、書いた作品をお渡した時の喜ぶ顔を見るとすごく嬉しいし、やりがいもあります。これからも、多くの方に見ていただき、喜んでもらえるよう、寄席文字を書き続けていきたいです。」と今後について話してくれました。

取材をさせていただき、手書きの文字は、思いが込められ温かみがあることを改めて感じました。パソコンやスマートフォンでの普及により手書きする機会が少なくなった現代だからこそ、文字を書くことで新たな日本語の魅力を再認識できるのかもしれない。

紙以外にも、木の看板や扇子、提灯などへ書くことにも挑戦しているという寺嶋さんの今後のご活躍が楽しみです。



文字をバランス良く配置するためのレイアウト(割り付け)を考えるのも楽しみの一つ。「めぐり」のほか、毎年開催される墨田区の文化祭や「橋流寄席文字合同新年会」に出展する作品作りにも意欲的に取り組んでいる

